

小学校第2学年における『論語』の実践研究

*鹿 野 里 奈
*田 中 大 輝
*那 須 茜 衣
*増 田 芽
**谷 口 匡

1. はじめに

2022年度京都教育大学前期科目「小学校国語科教材論C」において小学校の国語科における漢文の教材開発・指導法を学び、6月30日に京都教育大学附属京都小中学校（以下「附属京小中」と略称）で行われた藤田智之教諭（肩書きは当時。現共立女子大学准教授）による小学校2年生における『論語』の授業を見学した。それらをもとに、小学校低学年における『論語』教材について研究し、京都教育大学国文学会（2022年11月23日）において発表を行った。本稿は発表の内容を踏まえ、以下2～3は増田、4は増田・田中、5は谷口、6～8は田中、9は那須、10は鹿野が原稿を作成した。全体の討議を経て各自が改稿し、さらに谷口が表記や内容について全体の統一を図った。なお藤田教諭にも原稿に目を通していただき、貴重なご意見を賜わった。

2. 小学校学習指導要領における漢文の位置づけ

平成29年3月告示の小学校学習指導要領（国語）における「我が国の言語文化」に関する項目に注目すると、1・2学年では、『古事記』が原作となっている「いなばのしろうさぎ」の読み聞かせは行われていたが、学習指導要領に関しては漢文の授業は想定されていなかった。また、3・4学年では故事成語の意味を知って日常生活で使う活動、5・6学年では漢文の響きやリズムに親しむ活動が想定されている（表1）。

(表 1) 小学校学習指導要領における漢文に関連する記述

1・2 学年	・ 昔話や神話、伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと ・ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと
3・4 学年	・ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと
5・6 学年	・ 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと ・ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や考え方を知ること

3. 小学校教科書における『論語』教材の状況

小学校教科書では、光村図書（5 年）、教育出版（5 年）、東京書籍（6 年）の三社で『論語』が漢文の教材として取り扱われている。

光村図書は「声に出して楽しもう」という単元で、コラムのような形で論語がどのようなものなのかについての説明と書き下し文、現代語訳が書かれている。漢文の朗読を聞くことができる QR コードがあるなど、音に注目して漢文の学習に取り組めるようになっている。

教育出版は「漢文に親しむ」という単元で『大学』と並べて紹介し、「人々の考えを表した文章」と説明する。「温故知新」の四字熟語に触れながら「故きを温ねて新しきを知る」の書き下し文と解説が紹介されている。想定されている活動としては、声に出して読み、響きを味わうことやそこから感じたことを書くものがあつた。

東京書籍は「漢文に親しむ」という単元で、日常でも用いられることのあるフレーズである「百聞は一見に如かず」の言葉が中国から来たものであることに触れている。『論語』自体についての説明と、教訓として『論語』の「一を聞いて以って十を知る」と「子曰はく、「故きを温めて新しきを知る、以って師となるべし」と」の二つを紹介する。感想を言い合うような活動が想定されており、他二つの教科書と比べて、原文が載っていたことが特徴的であつた。

以上から、中学校での本格的な内容を読み解く漢文の学習に向けて、小学校の多くの教科書で『論語』が響きやリズム（以下「響きやリズム」の意味で「リズム」という）および内容に親しみやすい教材として用いられていたと考えられるだろう。

4. 本研究における問題意識

これらの状況を踏まえると、以下のようなことがいえよう。

- ・「いなばのしろうさぎ」（『古事記』）の読み聞かせが低学年で行われているのであれば、現在高学年でしか取り扱われていない『論語』も教材として扱えるのではないか。
- ・『論語』は日本で一番広く親しまれている漢文の一つであり、日常生活でも触れる機会が多くある。
- ・中学・高校の漢文の授業では文法や意味に重点が置かれた授業が展開される中、それらを気にせず単純にリズムに親しんだ授業ができるのは小学校での学習である。
- ・小学校低学年の時点で“『論語』は楽しい”というイメージを抱くことで、高学年や中学での学習活動がより積極的なものになる。

2の表1に示したとおり、小学校1・2学年の「我が国の言語文化に関する事項」には漢文についての記載はなく、小学校2年生に対する『論語』の授業は、学習指導要領をさらに一歩進めた新しい試みといえる。

そして、小学校2年生に対する『論語』の授業では、文法や現代語訳にとらわれず、純粹にリズムを楽しむことができるように、語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することを目標としていた。それは、学年や校種が上がるにつれて、古文や漢文を学ぶときに、文法や現代語訳を気にしながら読んでいくことが多くなるからである。そのため、『論語』を取り扱うのはもう少し後になってからでもよいが、その頃には、リズムを楽しむことよりも現代語訳を気にしながら読むことになるだろう。純粹にリズムを楽しめる低学年だからこそ、『論語』の授業を実施する意義があるのではないだろうか。

5. 2012 年の授業実践

6 月 30 日の授業について述べる前に、それに先行して過去に藤田教諭が実践した小学校第 2 学年での『論語』の公開授業を紹介しよう。

それは 2012 年 2 月 17 日、附属京小中の教育実践研究協議会において行われた。詳細は同校が発行する冊子『平成 23 年度教育実践研究協議会 国際化社会に対応し、自己実現をめざす生徒の育成＝大学・地域との連携プロジェクト＝』に譲るが、指導計画は下記の全 7 時間からなる。

第一次 リズムを感じながら読もう

第 1 時 声に出して読んでみよう「春暁」

第 2 時 「人日立春」を聞いて、どんな音が聞こえるかな

第 3 時 好きな漢詩を選んで、読んでみよう

第二次 昔の人の考えにふれよう

第 1 時 論語って何だろう

第 2 時 君子と小人をくらべてみよう①（本時）

第 3 時 君子と小人をくらべてみよう②

第 4 時 好きな論語を選んで、読んでみよう

ここで取り上げる公開授業は、上記に「本時」とある、第二次の第 2 時「君子と小人をくらべてみよう①」で、その目標は「論語を読み、好きなものや興味のあるものを選び音読することができる」、評価は「選んだ理由を話し、音読することができたか」で、本時の展開は以下のとおりであった（当日の配布資料による。一部省略）。

分節	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点	評価
I	○本時のめあてを知る	・ 本時のめあてを把握し、めあてを確認できるようにする。	
	好きな文を見つけて読もう		
II	○範読を聞いて、気がついたことや感じたことを話す。	・ 音声から情報を取り出し、考えることができるように、ゆっくりはつきりと範読する。	

Ⅱ	○書き下し文を見て、文字から気がついたことを話す。 ○音読する。 ○紙芝居を聞いて気がついたことを話す。 ○もう1つの書き下し文を見て、気がついたことを話す。 ○音読する。 ○気に入った一節を視写する。	・隣同士で気づいたことを話す場を設け、二人で交流後、全体で交流する。 ・全体で声に出して、読んで気づいたことを話す機会をとる。 ・内容のだいたいを考え、知るために紙芝居形式で話す。 ・書き下し文を提示して、気づいたことを全体で交流する。 ・気に入った一節を書くように指示する。	
Ⅲ	○ペアで音読する。 ○選んだ理由を話し、発表する。 ○音読する。	・机間指導して、読みを確認する。 ・自分が選んだ理由を話した上で、一節を読むことを指示する。 ・全員で音読する。	気に入った一節を選び、音読することができる。 (観察)

教材とした『論語』は、授業で用いられた順に示すと次の二つである。

A 子曰はく、君子は和して同ぜず。小人は同じて和せず。(子路篇)

B 子曰はく、君子は人の美を成す。人の悪を成さず。小人は是れに反す。(顔淵篇)

Aについては、授業者が範読する（耳で聞く）、書き下し文を見せる（文字を見る）、音読する、紙芝居によって内容を示す（内容を理解する）というように、次第に情報を増やしながら、何度も『論語』の本文に親しむように工夫がなされている。

なかでも特徴的なのは、紙芝居によって内容理解を図ったところである。紙芝居は、話し合いに参加せず、言われたとおりに何でもやってしまう人と、話し合いに参加して、同時に自分の意見がいえる人という二人の人物

を登場させて比較した内容で、具体的な場面による絵と読み聞かせによって、児童はAの大体の内容を知ることができた。逆にいえば、「和」や「同」という言葉に即した解説は一切省略し、「君子は和して同ぜず」「小人は同じて和せず」をそれぞれ一つのかたまりとして、全体としての内容理解を図ったのである。

Bについては初めから書き下し文を見せる。児童はすでに「君子」「小人」の語にはなじんでおり、ここでは紙芝居を使った解説はなかったが、「美」「悪」「反す」ということばから、内容の大体をつかめていた。

そしてこの授業では内容に立ち入りながらも、音読を何回も行っていた。ペアでの音読では一人と終わったら一つずつ席を移動して、異なる五人と読み合うなど、音読をくり返すことで、最終的には音声としての『論語』に親しんでいた。

高等学校の漢文で行うような、漢字、漢語の意味や文法に即して理解し、積み上げていくのではなく、音声と内容と、それぞれ別々に全体を一かたまりとしてとらえて親しみ、全体としてつなげるという方法である。そのため、内容の把握には逐語訳的な現代語訳ではなく、紙芝居が用いられたが、これが2年生には大変有効であった。

6. 今回の授業の概要

次に今回見学した藤田教諭の授業について述べる。

- ①日時 2022年6月30日(木) 5時間目(13:50～14:35)
- ②学年 第2学年 32名
- ③学習教材 『論語』
- ④学習目標 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。
- ⑤評価 自分が選んだ理由を伝え、音読しようとしている。
- ⑥指導計画(全1時間)

導入 先生に続いて『論語』を読む。

展開 お気に入りの『論語』を選ぶ。

まとめ お気に入りの『論語』をみんなで読み合う。

⑦使用教材

- 1 子曰く、「人の己^{おのれ}を知らざるを患^{うれえ}へず。人を知らざるを患^{うれえ}ふ。」

- 2 子曰く、「利によりて行へば、怨み多し。」
- 3 子曰く、「之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。」

藤田教諭がこの三つの『論語』を選んだ理由であるが、1は「ざる」や「うれえず」といった文語特有の読み方が入っているため、昔の言葉に馴染むのに適しているということである。2については短い文が良いと感じる子どものために選び、3はリズムが良く、程よく短いから選んだということだ。以下に本時の目標と展開を示しておく。

・本時の目標

言葉の響きやリズムを味わい音読する

・本時の展開

	学習活動と内容	指導上の留意点・支援 (教師の活動)	評価方法
導入	1. 本時のめあてを知る。	・ 本時のめあてを板書する。	
	声に出して論語を読もう		
展開	2. 教師の範読を聞く。	・ 三つの論語を順に読み聞かせる。	
	3. 三つの論語を声に出して読み、気がついたことやわかったことを話す。	・ できる限り、ゆっくり読みどんなことを言っているのか想像させる。 ・ 教師の後に続いて、論語を声に出すように指示する。 ・ 耳で聞いたり、声に出したりして読むことで、内容を想像させる。 ・ ペアでどんなことを言っているのかを話し合わせる。	

展開	4. 書き下し文を見て、気が付いたことや思ったことを話す。 5. 論語の内容を知る。 6. 自分が読みたい論語を選び、その理由を書く。 7. 選んだ理由を伝え、論語を読みあう。	・黒板に書き下し文を提示して、気が付いたことをペアで話をするように指示する。 ・何が書かれているのかを説明する。 ・孔子が弟子たちに向けて話したこと等を伝える。 ・三つのうち、自分が読みたい論語を選び、その理由を書くことを指示する。 ・机間指導して理由を書けない生徒には、論語のみを選ばせて、後から書くように伝える。 ・選んだ理由を書いた生徒を2名指名して、その理由を発表させる。 ・学級全体で移動しながら、ペアになり論語を読みあう。 ・できるだけ多くの友達とペアになり、論語を読み、聞くことを伝える。	自分が選んだ理由を伝え、音読しようとしている。
振り返り	8. 本時の学習を振り返る。	・それぞれの論語を選んだ生徒全員で論語を読む。	

7. 今回の授業の実際

①導入

授業が始まると、「机の上は筆箱だけにしてください」と教師が伝え、教科書を使わないことを指示した。そして、教師が黒板にめあてを書いていく時にいつもはめあてを復唱するが、この授業に関しては復唱せず、黒

板に書くだけにとどめた。その意図は授業の最後に『論語』の読み方を明かすためであった。『論語』という漢字を小学校2年生はまだ習っていないので、「なんて読むんやろう？」という声も上がっていた。

そして、教師が三つの『論語』を読み上げる。児童には何も見せず、ただ教師の話す『論語』のみを耳で聞いていた。音読を聞いて気づいたことを隣の人同士で話し合い、「子曰く」が三つの『論語』とも入っているという声が児童から上がっていた。

次に、教師が音読したものの書き下し文を黒板に貼り出した。そして、貼り出したものを見ながら児童が音読をしていく。三つの『論語』を貼り終わり、音読した後でペアで思ったことを話し合ったところ、「子曰く」の文字を見て「子どもの『子』がある」や「『子』どもの『日』ではないか」という言葉が上がっていた。

そのあとで、「子」について教師は、中国の人であるということを孔子の肖像画を見せて「孔子は中国にいた人で、先生だった」ということを説明した。

次には、教師が現代語訳の書かれた紙を黒板に貼り出し（48 頁写真 1）、音読をする。現代語訳を発表するが、児童にとって現代語訳は難しいものである。児童からも「ちんぷんかんぷんやー」という声が上がっていたが、そこで教師が身近な分かりやすい例を提示すると理解できた。例えば、「ブランコ 1 人 30 秒やのに、40 秒乗っている人がいたらみんないややろ？」と聞くと、児童は「いややー」と反応して、理解できていた。

現代語訳を確認した後、書き下し文と現代語訳が書かれたプリントを児童に配布し、三つの『論語』の中からお気に入りの『論語』を児童が一つ選び、選んだ理由もプリント（ワークシート）に記入させた。

そして、ワークシートを書き終わると、選んだお気に入りの『論語』を個人で音読練習し、それが終わると、クラスの人たちと読み合う活動をした。初めは隣の人と、次に教室中を歩き回り、出会った友達と選んだ『論語』と選んだ理由をお互いに言い合うという活動であった（48 頁写真 2）。

授業の最後では、授業で取り扱った三つの『論語』をもう一度全員で音読した。そのあとで、自分が選んだものだけを立って音読した。教師が「覚えた人、手挙げて」と聞くと、ほぼ全員が手を挙げており、理解できてい

た。そして、最後にめあてに書いてあった『論語』の読み方が「ろんご」であることを明かして授業が終了した。

8. 今回の授業の分析

児童が選んだ『論語』の理由について、大きく二つに分けることができた。まず一つ目は、リズムが理由なものである。言いやすかったり、逆に言いにくいものを選んだりなど、リズムを理由に選ぶ児童がいた。もう一つは内容が理由のものである。現代語訳を一緒に提示したので、意味を理由に選ぶ児童も多くいた。教師の狙いとしては、リズムに親しむことが狙いだったので、リズムを理由に選ぶかと思われたが、意外にも内容を理由に選ぶ児童が多くなったという結果だった。

小学校第2学年に対する『論語』の授業の特徴としては、以下のようなプロセスがあった。

まず、『論語』を音だけ聞いたとき、児童は何のことを言っているのか理解することができず、「ちんぷんかんぶんやー」という声が上がった。

次に、書き下し文を見るが、これも日本語ではあるものの、見慣れない文であるため、児童は意味がよくわからない。

そして現代語訳をみるが、逐語訳ではまだ理解が難しい。

そこで教師が分かりやすい身近な例を示すことで、児童は内容を理解することができた。このようなプロセスで『論語』を学習すれば小学校2年生に対しても『論語』や漢文の授業ができるのではないか。

一方で藤田教諭が感じている課題もある。好きな『論語』を選ぶまでに三つの『論語』について考え音読する時間が少なかったことである。リズムに親しむという意味では、授業を通しての音読量もお足りない。

指導の観点では、ブランコの例は内容理解を助けるのに適切だったか、言葉のリズムや響きを児童に感じさせる工夫があったか、内容理解のための視覚的な手立てがあったか、三つの『論語』を十分に吟味して選択されたものだったかなどの反省が同教諭から出された。

9. 新しい授業の提案

藤田教諭の授業実践を踏まえて、新しい授業提案を行ってみたい。

提案する授業が、藤田教諭の実践と異なる点は二つある。一つはリズムや響きではなく、意味を重視する点である。授業実践の報告にもあったように、児童は予想以上に内容に興味を持っていることが分かり、内容重視の授業もできるのではと考えたことが理由である。もう一つは、『論語』や孔子という言葉を一度も使わない点である。授業実践では『論語』や孔子も紹介されていたが、予想していたほど児童の反応が得られなかったため、今回の授業提案ではそれらの言葉には触れないことにした。高学年でも『論語』が扱われているため、低学年ではあくまで中国の昔の言葉に親しみを持つ、という観点の授業になるよう心がけた。

提案する授業では「思考力、判断力、表現力」の「話すこと・聞くこと」より（1）「ウ 伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること」、「読むこと」より（1）「オ 文章の内容と自分の体験とを結びつけて、感想を持つこと」を目標とした。目標を踏まえ、授業内で児童に示すめあては、「自分の経験を昔の言葉で伝えよう」とする。

授業の流れを説明する。

まず授業の導入についてである。扱う章は「利によりて行えばすなわち怨み多し」（里仁篇）の一つのみに設定した。まず始めに、教師が児童にその章の具体例になるエピソードを聞かせる。そしてエピソードの最後に、「この話はまさに、『利によりて行えば怨み多し』だと思いました」のように『論語』を引用する。児童が聞き馴染みの無い言葉に反応することが予想されるため、その聞き馴染みの無さも含め、教師のエピソードを聞いてどんな感じがしたか数人に尋ねる。その後、「自分の経験を昔の言葉で伝えよう」というめあてを確認し、導入を終える。

続いて展開についてである。最初は、「自分のことだけを考えてした行動やされた行動で、反省したり嫌な思いをしたりした経験」があるか考える活動を行う。個人で考えたあと、グループで共有する。『論語』に似た経験があると分かれば、親しみが増すと考えて設定した活動である。

グループで意見の交流を終えたら、扱う章の音読をする。読む度にイメージが広がるように、3段階に分けて音読する。1段階目では中国の言葉と知って読む、2段階目では昔中国にいた偉い先生が、弟子に伝えた言葉だと知って読む、3段階目では思い出した自分の経験を思い浮かべながら読

む、というようにイメージする内容を変えながら音読を行う。

ある程度読むことに抵抗がなくなってきたら、めあてにつながる活動に入る。自分の経験を他の人に伝えるため、ワークシートに、この言葉を伝えたい人とその理由を記入させる。展開の最後の活動として、エピソードの発表と章の音読を設定する。その章に合った自身のエピソードの発表、章を伝えたい人の発表、章の音読、の順になるように児童に発表させる。授業のまとめでは、もう一度自身のエピソードを思い出しながら個人で扱う章の音読を行う。

以上が提案する新しい授業である。以下に本時の展開とワークシートを示す。

	学習内容	指導内容	準備物
導入	1. 教師の寸劇・教師のエピソードを聞く。	・今回扱う章の具体例になるエピソードを話し、最後にその章を言う。 ○「まさに“利によりて行えば怨み多し”だなあと思いました。」	・ワークシート
	・教師が最後に言った言葉を聞いて、どんな感じがしたか答える。	・どんな感じがしたか聞く。	
	2. めあてを知る。	・ワークシートを配布する。 ・めあてを黒板に書く。	
	自分のけいけんを、むかしのことばで伝えよう		
	ワークシートにめあてを書く。 ・めあてを全員で読む。		
展開	3. 似た経験を考え、グループで共有する。 ・個人で考える。 ・その後グループで共有。	○「自分のためだけを考えて行動して、失敗したことや、相手に自分勝手なことをされて嫌だったことはありませんか。」（「利によりて…」）	
	4. 経験を発表する。		

展開	5. ワークシートを見る。 ①中国の言葉と知ってから読む。 ②中国の偉い先生が弟子に伝えた言葉だと知ってから読む。 ③自分の経験を思い出してから読む。 6. 自分が伝えたい言葉、伝えたい相手とその理由をワークシートに記入する。 7. グループで発表する。 ・選んだ理由→誰に伝えたいか→選んだ章の順で発表する。 8. クラス全体で発表する。	・黒板に章を書いた模造紙を貼る。 ・段階的に音読をさせる。 ①「もともとは中国の昔の言葉です。」 ②「中国に昔いた、偉い先生が弟子たちに伝えた言葉です。」 ③「さっき考えた自分の経験を思い浮かべながら読んでみましょう。」 ■章と伝えたい理由が関係しているか。 ・発表の仕方を黒板で示す。 ・児童の発表前に、教師が例を示す。	・模造紙
まとめ	9. 全員で読む。	○経験を思い浮かべて読んでみましょう。	

○ワークシート

「利によりて行えば、すなわち怨み多し。」 ← だれにつたえたいか (その時のうにこのことばをつたえたいです。) ← (うなけいけんをしました。) ← どんなけいけんをしたか ○はつびょうの方ほう	「つたえたい人」() 「どんなけいけんをしたか」	意味 自分のことばかりを考えてこうどうすると、うらまれることが多い。	①利によりて行えば、すなわち怨み多し。	めあて	〈おかしなことば〉 年 組 名 前 ()
---	---	---	----------------------------	------------	-------------------------------------

10. まとめ

今回の研究を通して、『論語』の内容を日常生活の中の身近な出来事に置き換えることで、児童にわかりやすく伝えられることがわかった。

『論語』は日常の経験と重なる身近なものが多いので子どもにもわかりやすく、日常の経験に結び付けて親しめる古典の一つである。よって伝統的な言語文化に親しむ第一歩として、『論語』を低学年向けの教材として扱うことは十分可能なのではないだろうか。

さらに、実際の授業を見学すると、児童は『論語』のリズムとともに内容も重視して考える傾向があった。その様子から、学習指導要領に基づくと一般的には音読が重視されている小学校第2学年でも、実際には内容から『論語』を捉えて学習しようとしていると考えられる。しかし同時に、児童が音読をするだけの活動でも十分に楽しんで行っている様子がうかがえたことから、『論語』に対してのアプローチの仕方がリズムにもあるのというまでもない。

私たちは「ク 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること」という学習指導要領に沿ってリズムを重視した授業案を考えていた。しかし、授業を見学した結果、児童が予想以上に『論語』の内容に興味を示したことから、今回は内容を重視した授業を提案した。今後はリズムを純粋に楽しむ授業の方法を探っていくことも課題にしたい。

(*本学国語領域専攻三回生)

(**本学教授)

授業の様子 (43 頁参照)



写真1 現代語訳を黒板に貼る



写真2 『論語』を互いに読み合う